■ フォトエッセイ ■

ハーシーチョコレートとキューバ
―ヘルシー村・ヘルシー鉄道・製糖工場

写真・文 山岡加奈子
Kanako Yamaoka

ヘルシー駅に停車したハーシーの電車

一九〇二年の独立後、アメリカとの緊密な経済関係を築いたキューバは、政治的・経済的な従属と引き換えに、経済的繁栄を謳歌した。独立後、アメリカ資本はキューバの製糖業や牧畜業に投資し、生産物をアメリカに輸出すると同時に、そのために必要なインフラ建設に莫大な投資を行った。キューバがラテンアメリカのなかで、電気や電話、上水道、鉄道といったインフラ整備ではもっとも早い時期から整備が進んだ国々のひとつであるのは、アメリカ企業の投資のおかげである。

ヘルシー(Hershey)村は、一九一九～二〇年にアメリカのハーシー・チョコレート(Hershey Chocolate)会社が、チョコレートの原料となる砂糖をキューバで生産し、ハーシー社がチョコレート工場を持つアメリカ・ペンシルバニア州に輸出するための基地として建設した町で、ハーシーの社名がそのまま村の名前になっている(ハーシーをスペイン語読みするとヘルシーになる)。村はキューバの首都ハバナから東へ約五〇キロメートル行ったところにある、海岸近くの小高い丘の上にあり、当時は製糖工場や農場で働く労働者と幹部が住んでいた。町の構造と建物はアメリカ東部式で、スペインの影響が色濃いキューバの他の町や村とはまったく異なる趣きを持つ。

ハーシー電車の内部。観光客はまだ着いていない。この人達はキューバ人乗務員

ヘルシー鉄道で、一般乗客を乗せて走る旧東ドイツ製の電車。
ハバナとハバナの東隣の州マタンサスの州都マタンサスをつなぎ、1日数回走っている

村の周囲には、サトウキビ農園、そのサトウキビを砂糖にする製糖工場が一九一八～一九年に、農園と工場を結び、さらに出来上がった砂糖をハバナ港へ運ぶための鉄道が一九一七年に、ハーシー社自身によって建設された。第一次世界大戦後のアメリカ経済と、欧州向け輸出両方の急成長と重なっている。この鉄道は蒸気機関車が主流であった当時のキューバで初めての、そして現在は唯一の電気機関車である。キューバにはサトウキビや砂糖を運搬するため、ラテンアメリカではもっとも早くから鉄道が敷設されたが、それはすべて蒸気機関車であり、後にディーゼル機関車に変わるが、ヘルシー鉄道だけは線路の上に電線が走り、そこから電気をとって動力源とする、日本で見慣れた電気機関車が走る。

ヘルシー村は、町の中心部にメインストリートがあり、その両側に店や学校など住民が日常利用する施設が立ち並ぶ。アメリカ東部の町を髣髴とさせる町並みである。教会はスペイン植民地の特徴である町の中心ではなく、むしろはずれに建てられている。ただ家々の屋根、とくに幹部が住んでいた大きな家がスペイン式のオレンジ色の瓦で葺かれているところは、ここがアメリカではないことを自覚させるものだが、一般労働者の家はパステルカラーに塗られた木造であり、アメリカ東部の中産階級の家そのものである。ハーシー社は学校や病院も建てた。また郊外には、住民向けの自然公園まで建設されている。

ハーシー電車の運転席、観光客は運転もさせてもらえるとか（上）
ヘルシー駅の前にいたパン売りのおじさん。これからヘルシー村へパンを売りに行く。パン1本が0.5兌換ペソ（約50円）（下）

ハーシー社が従業員の娯楽施設として建てたハーシー自然公園の入り口。現在もヘルシー庭園として憩いの場になっているが、車がないと村からはちょっと遠い

ヘルシー村のなかの小学校。革命前も村の学校だったが、革命後も引き続き、小学校として使われている

ハーシー社は村のために診療所も建てた。医師が一人、看護師が一人働いていた。現在も地域の診療所として使われている

診療所で働く医師のための住宅も、診療所の隣に建てられていた

革命前の季節労働者の宿舎。これは入り口だが、両脇に20平米くらいの部屋が並ぶ。すでに屋根は落ち、遺跡のようである

一般労働者の住宅

一時的に滞在する工場やサトウキビ農園を訪れる出張者やお客のための宿泊施設。現在は役所として使われている

二〇一〇年一〇月、筆者は友人の、そのまた友人の研究者夫妻を訪ねて、初めてヘルシー村に足を踏み入れた。まず驚いたのは、革命後五〇年以上たっても、ヘルシー村はアメリカ式の町並みをそのまま残していること。そしてハーシー社がペンシルバニアから輸入した一九一七年製の電車が、まだ走っているという驚きの事実だった。ただし村はずれの操車場に数十両も駐車されていた、旧ソ連で見かけたものとそっくりの、暗い緑色の電車はハーシーの電車ではなく、革命後に旧東ドイツから輸入された中古車輌だそうである。そしてハーシーのオリジナルの電車は、今当時のままに鮮やかな緋色と紺色のしゃれた色に塗られ、観光客向けのレトロ鉄道ツアーに使われている。筆者が訪れた日も、ちょうどドイツからの観光客グループを乗せる予定だと聞かされた。キューバでは革命前のフォードやGM製のアメリカ車が、大事に修理を重ね、美しく塗装されて走っているが、ハーシーの電車もまた、大事に修理されて走り続けている。

ハーシー社が建設した巨大な製糖工場も、革命後、革命の英雄の名をとった国営「カミーロ・シエンフエゴス」製糖工場となって、数年前まで操業していた。しかしソ連崩壊後、非効率な砂糖産業はついに行き詰まり、

村の中心部にある店の列。手前は薬局。今ももちろん同じように店として使われている

同上。手前は荒物屋、奥は食料品店

「カミーロ・シエンフエゴス」製糖工場を丘の下から望む。手前はバナナ畑

「カミーロ・シエンフエゴス」製糖工場。まだまだ立派な姿

やまおか　かなこ／アジア経済研究所　ラテンアメリカ研究グループ

ラテンアメリカ研究（キューバ）、国際関係、政治学が専門。
近著に、「キューバの高齢者生活保障に果たす国家の役割」（宇佐見耕一編『新興諸国における高齢者生活保障制度―批判的社会老年学からの接近』（研究双書No.594）アジア経済研究所、2011年）がある。

二〇〇二年にフィデル・カストロは製糖工場の半数を閉鎖する決定を下す。ヘルシー村の製糖工場も二〇〇五年に閉鎖された。

ヘルシー村で気づくのは、キューバの他の地域に比べて住宅がきちんとしていることである。社会主義国の例に漏れず、キューバでも住宅建設やすでにある住宅の維持が行き届かないのだが、ヘルシーの場合は、新しい家の建設や改築もけっこう見られる。しかしこの裏では、閉鎖された製糖工場の建物の機材が分解され、横流しされているようなのである。フェンスや鉄骨など、しっかりした住宅を作るのに不可欠な材料は、製糖工場の建物から来ているというわけだ。

一〇〇年近く前、アメリカ一のチョコレート会社のチョコレートに入れる砂糖を生産していたこの製糖工場は、一九五九年の革命後はソ連産原油を燃料に、東側ブロックのコメコン諸国に輸出する砂糖を生産していたことだろう。すでにこの工場の栄華の時は過ぎ去った。

しかし工場には最後の任務がある。周囲の村々に建築材料を提供すること。自らの体である機材を製糖業に従事した労働者やその家族に提供し、おそらく数年後には崩壊・消滅する。とはいえ、普通の資本主義国ならただのスクラップになる運命である。最後までコミュニティの役に立つこの工場は、キューバの変転する運命のなかで、最後までその役割を全うしようとしている。最初は無常感に襲われ、奥の細道の「平泉」の冒頭、三代の栄耀一睡のうちにして……が頭に浮かんだ筆者であるが、最後はむしろすがすがしい思いに満たされたのだった。そう、この工場はそれでいい。これで十分なのだ。